（別紙２）

審査の結果の要旨

氏名　吉田（よしだ）　幹生（みきお）

本論文は、文学的素材としての〈待つ女〉像の形成と展開の様相を通して、７世紀の初期万葉の時代から 11 世紀初頭の『源氏物語』に至るまでの和歌・日記・物語を包摂するダイナミックな文学史を構想したもので、三篇に分かたれた九章から成る。

第一篇「〈待つ女〉の誕生」は、「額田王と鏡王女の唱和歌」「七世紀の日本文学と閨怨詩受容」「石見相聞歌の抒情と方法」の三章において、まず日中の古代詩歌を比較して、７世紀の日本にはまだ閨怨詩を受容しうる文学的基盤は形成されていなかったとし、男女の交感的連帯を確保しようとする相聞歌から、夫や恋人の不在の悲しみを内省的に表現する〈待つ女〉の歌が生まれてくる契機を、７世紀後半の挽歌や柿本人麻呂の石見相聞歌のうちに析出している。さらに第四章「怨恨歌の誕生とその周辺」では、８世紀・後期万葉の相聞歌に、男の心変わりを鋭く衝くような歌も詠まれるようになるなど、平安朝の恋歌や日記・物語に表現される〈待つ女〉の諸相が先駆的に現れていることを明らかにしている。

第二篇「〈待つ女〉の展開」第一章「『竹取物語』難題求婚譚の達成」は、上代から平安前期にかけての妻争い伝承の和歌・歌語りの展開を、第一篇で分析された和歌史の流れのなかで捉えなおし、そこに『竹取物語』のような難題求婚譚が胚胎されてくる様相を克明に浮かび上がらせている。第二章「〈人の心〉から〈我が心〉へ―『蜻蛉日記』試論―」は、『蜻蛉日記』の上巻から中巻にかけて、〈人の心〉(不実な男心)を嘆くことから〈我が心〉を凝視するようになるという顕著な変化が認められることを指摘し、この内省の深化が、『源氏物語』に描かれるさまざまな〈待つ女〉の形象に受け継がれてゆくのだとする。

第三篇「『源氏物語』と〈待つ女〉」第一章「夕顔造型試論」は、夕顔と光源氏の、お互いの素性も秘し合った濃密な交情が、非日常的なつかのま恋として終わるほかなかったところに、この物語の冷徹なリアリズムがあることを論ずる。第二章「六条御息所の生霊化」は、御息所の生霊化に至る心理描写を精緻に分析し、ほかの主要な女性たちにも通底する〈待つ女〉の問題がそこに集約されている様相を彫り深く浮かび上がらせている。最終章「蓬生巻の末摘花」では、須磨に退居した光源氏からまったく忘れ去られていながらも、彼の再訪を固く信じて待ち続けた蓬生巻の末摘花について、物語はけっして彼女を美化してはいず、つねに戯画化される彼女の頑迷さはこの巻にも一貫していることを指摘して、そこに〈待つ女〉の苦悩をきわめ尽くした物語作家のアイロニカルな視線を捉えている。

本論文には、中国の閨怨詩との比較が不十分であることなど、なお論を精錬する余地がないわけではないが、〈待つ女〉という普遍的にして問題集約的な文学的素材の形成と展開を通して、和歌・日記・物語をも包摂するダイナミックな文学史を構想し、それを明晰に論じた功績は、研究の細分化した今日にあってはことに高く評価されるものである。よって本審査委員会は、本論文が博士（文学）の学位に値するとの結論に達した。